

自己愛に関する研究の概観

—ナルシシズムとセルフラブ、および、 質的な性差に焦点を当てて¹⁾—

松 並 知 子

近年、自己愛は犯罪や青少年の問題行動に関連して言及されることが多く、自己愛研究も盛んに行われている。しかし、「自己愛」という日本語には肯定的なself-loveと否定的なnarcissismが混在しており、自己愛の問題は理解し難くなっている。本研究では、自己愛に否定的な意味を持つナルシシズムと肯定的な意味で使われるセルフ・ラブの両方が含まれていることを考慮しつつ、自己愛に関する理論と研究を概観する。また、自己愛人格傾向の表れ方や自己愛人格障害が男女で異なることが示唆されていることから、本研究では、自己愛人格傾向の質的な性差、および、ジェンダーとの関連についても検討することを目的とする。自己愛はジェンダーや性役割と関連があり、自己愛人格障害の症状は、男性の場合は「誇大的なタイプ」に、女性の場合は「依存的なタイプ」になる傾向があることが示唆されている。この「依存的なタイプ」の特徴は「すばらしい他者」を自己の一部であると感じることにより自己愛を満たそうとするものであり、対人恐怖心性をもつ「過敏型」とは異なるものであると推測される。今後は、この「依存的なタイプ」や自己愛の依存性についてもより詳細に研究されるべきであろう。

キーワード：自己愛、セルフ・ラブ、ナルシシズム、性差、依存的自己愛

1. はじめに

「自己愛」という言葉は、犯罪について、あるいは、青少年の問題行動などについて論じられる場合に、よく使われるようである。たとえば、大阪教育大付属池田小学校で起こった児童殺傷事件の犯人である宅間元死刑囚について、大淵（2003）は、凶行の原因は自分は特別な人間であるという強烈な自負心であり、エリートの象徴である池田小学校を犯行の対象に選んだのは満たされない自己愛のためであったと述べている。このように、被告の異常性を肥大化した自己愛と結びつけて論じているものが多い。また、オウムの麻原彰晃の誇大的自己愛について、精神医学者の牛島（1995）は、過保護の甘やかしではなく、むしろ、愛情が不足していたことが原因であり、親に対する報復の観念がその後の彼の行動を規定しているのではないかと述べ、親から愛されなかったことが肥大した自己愛、ひいては異常な言動の原因ではないかと推測している。青少年の問題行動との関連では、ひきこもりやニート、突発的な少年犯罪を自己愛と関連付けて論じている場合も多く（たとえば、岡田、2005；上地・宮下、2004；忠井、2005；矢幡、2005；山崎・妙木、2011）、「肥大した自己愛」や「歪んだ自己愛」こそが諸悪の根源であるという風潮さえ見受けられる。一方、若者の間では、「私探し」「私らしさ」という

キーワードが重要視されるなど、現代は、今まであまり馴染みがなかった「自己愛」という言葉が、最も注目されている時代だといっても過言ではないだろう。

1979年に出版された『ナルシシズムの時代 (The Culture of Narcissism)』において、Laschは、現代のアメリカ社会をナルシシズム文化と呼び、現代人は自己利益だけを追求するあまり、他者へのいたわりや配慮に乏しく、社会全体の理想や運命にも無関心であると述べた。そのような自己愛的な傾向は、アメリカだけではなく、現代の日本社会にも見受けられるという意見は多い。たとえば、大学の保健管理センターに医師として勤務する生地（2000）は、現代の大学生の特徴を表すキーワードは「自己愛的」ではないかと述べており、また、精神医学者の福島（1992）は、自己中心的で他者への思いやりのない自己愛的な性格をもった青年が着実に増加しているのではないかと指摘している。また、そのような自己中心志向が肥大した社会になった原因として、社会で共有していた理想像（自我理想）が失われたこと、つまり、社会的関心を向ける対象がなくなったこと（小此木、1981；大淵、2003）や、「私らしさ」を煽り立てる商業主義（矢幡、2005）などが挙げられている。

以上のような文脈においては、自己愛は自己中心性や利己主義とほぼ同様の意味で使われているようである。しかし、自尊心と同じような肯定的なニュアンスで使われる場合もあり、「自己愛」という言葉の意味は曖昧なままにされているのではないだろうか。「自己愛」は、主に、英語のnarcissismの訳語だと考えられている。だが、日本語の「自己愛」は「narcissism」と同義なのだろうか。本来の「自己を愛する」という意味を考えれば、narcissismより、むしろself-loveの方が意味に近いのではないか。narcissism同様、self-loveも、日本語では「自己愛」と訳される場合がほとんどである。つまり、「自己愛」という日本語自体に、肯定的なself-loveと否定的なnarcissismが混在しており（老松、2001）、それによって、自己愛の問題がより見えにくく理解し辛くなっているのではないだろうか。

Pulver（1970）は、narcissismには、防衛的なプライドに相当する「悪いnarcissism」と非防衛的な自尊感情に相当する「良いnarcissism」があり、前者は優越感や誇大妄想のような防衛的に肥大した自己尊重であるのに対し、後者は現実的で非防衛的な高度な自尊感情であると指摘している。Pulverのように、健康なnarcissismと病的なnarcissismを区別して考えている研究者は多い（山本、1997）。また、自己愛の表れ方には、適応的な表れ方と不適応的な表れ方の2種類があるとする研究もある（三船、2010；中村、2004）。それに対し、小塩（2010）は、自己愛の内部に適応的な要素と不適応的な要素があるのではなく、自己愛人格傾向と環境との相互作用の結果、適応的になったり不適応的になったりするのではないかと述べている。自己愛の本質を定義づけるとすると、「自己を価値あるものとして体験しようとする心の働き（上地、2004：7）」とすることが適切であると考えられるが、「自己を価値あるもの」と心から思えた場合、その表れ方は自尊感情などと同様の適応的なものになるが、「自己をどうしても価値あるものと思えない」場合には、他者からの賞賛を得ようと必死になったり、自己の価値を上げるために他人を利用・搾取しようとするのではないだろうか。また、「自己を価値あるもの」と心から思えるかどうかは、幼少時の環境や対人関係に大きな影響を受け、それによって自己愛の適応性・不適応性は変わってくるのではないかと推測できる。

本研究では、「自己愛」という言葉に、否定的な意味を持つナルシズム（narcissism）と肯定的な意味で使われるセルフ・ラブ（self-love）両方の意味が含まれていることを考慮しつつ、自己愛に関する理論を概観する。また、自己愛の性差に関しては様々な議論がなされているが、自己愛人格傾向の表れ方が男女で異なることが報告されており（e.g., 上地・宮下、2005；小西・山田・佐藤、2008）、自己愛人格障害が男女によって症状が異なることも示唆されている（e.g., Carroll, 1989；Tschanz, Morf, & Turner, 1998）。したがって、本研究では、自己愛人格傾向の質的な性差、および、ジェンダーとの関連についても検討することを目的とする。

2. ナルシズムに関する研究

(1) Freudの研究

精神分析にナルシズムという用語を本格的に導入したのは、Freudである。彼は、1914年に発表した著名な論文「ナルシズム入門」において、ナルシズムという言葉は、自分に性的関心を抱くこと、同性愛、また自分の身体や病気にばかり関心が向く心気症などに関連があるものと定義づけた。Freudは、ナルシズムを必ずしも病的な状態を表す言葉としてのみ使用したわけではなく、生きていくのに必要不可欠なものであるとしているが、それはあくまでも発達の途上、乳児期や幼児期に限って必要なものであり、成人がナルシスティックな状態にある、つまり、愛情や性欲あるいは関心が、相手に向かわずに自分に向かうというのは好ましくない状態だと考えていたようである。Freudはまた、親指しゃぶりや性器いじりのような「自体愛」は生まれたときから存在するものであるが、そこに、なにか1つ新しい「心的作用」が加わりナルシズムが成立する、そしてそこから、リビドーが対象に向くような「対象愛」に至るという心の発達モデルを想定した。また、親が子どもの幼児期に適切な養育態度をとらなかったことなどにより、正常な発達がなされず、未熟なナルシズム段階に停滞し、誇大自己に固着してしまった状態が自己愛人格障害であるとした。

このような考え方は、個人が一定量のリビドーしか持っていないという仮説に基づいている。したがって、リビドーが自己に向けられているときは対象を愛することができず、リビドーが対象に向けられているときは自分には関心が向かないということになる。このようなFreudの考えは、後述するFrommなどの考えの対極に位置するものである。この彼のナルシズムに対する見方が、後の精神分析や心理学に多大な影響を与え、ひいては、一般的な「自己愛」「ナルシズム」観にも影響していると考えられる。

(2) Horneyの研究

自己愛と他者愛は共存するものではなく、ナルシズム的な人が他人を愛さないのは自分を愛しすぎるためであるとしたFreudに対し、Horney（1939）は、ナルシズムは「自己へのリビドーの備給」というより、「自己膨張（インフレーション）」と定義すべきであり、「自己膨張は、正当な基盤がない性質か成績を自分と他人に示すことを意味する」（Horney, 1939：88）ゆえに、自尊心と自己膨張は相互に排他的なものであると主張した。

またHorneyは、ナルシズムは「自己からの疎外のあらわれ」とであると指摘し、「彼は自分

自身を見失ったために、また見失ったかぎり、彼は自分自身についてのまぼろしにしがみついているのだ」(1939: 88)と述べた。また、このような自己疎外に陥ったのは、「自己犠牲的な両親」「自分の野心を子どもに移している両親」に原因があるとしている。そのような親をもった子どもは、両親のためだけに生きなければならないという気持ちを抱き、また、愛されるためには、こうあって欲しいという他人の期待通りにしなければならないと思うあまり、自分自身の意思や感情が麻痺させられてしまう。その結果、子どもは他人の評価のみに依存するようになる。また、子どもの自尊心を挫き、自信を損なうような態度をとる親によっても、子どもは「自己膨張」的になったり、マゾヒズム的（他者依存的）になる傾向があるとしている。

以上のように、Horneyは、健康なナルシズムやセルフ・ラブという言葉は使っていないが、ナルシズムの病理性と原因について明言しており、「自尊心」とナルシズムは質的に全く異なるものであると主張している。彼女のこの指摘は、後述するFrommの説とほぼ同様のものであり、臨床家であり自己愛の研究者でもあるAsperやMillerの理論とも通ずるものである。

(3) Kohutの研究

自体愛→自己愛（ナルシズム）→対象愛というFreudが提唱した発達ラインとは別に、自己愛（ナルシズム）が、未熟な自己愛から健康な自己愛へと発達していくという、もう1つのラインがあることを主張したのが、Kohutである。言い換えれば、ナルシズムを特異なものにするのは、リビドーの向かう対象ではなく、そのリビドーの持つ性質によるのである（伊藤、1982）。Kohutによれば、自己愛は成長とともに消えるものではなく一生続くものであり、自己愛を持っているからといって、対象愛を持てないというわけではない。むしろ、成熟した自己愛は創造力の源泉になることもあるという。これは、成人になってからも持ち続けられている自己愛は病的であり、自己愛が強い人は対象愛を持てないとしたFreudの意見とは全く異なるものとなっている。

Kohutの理論では、正常な発達を遂げれば、子どもの持つ未熟な万能感は成熟した自己愛へと変形するが、そのためには以下の2つの自己愛構造体が重要になってくる。1つは「自分は偉いんだ、賢いんだ」あるいは「偉くなりたい、賢くなりたい」というような「誇大自己」と呼ばれる自己愛であり、もう1つは「うちの親は何でもできるんだ」というような「理想化された親イメージ」と呼ばれるものである。Kohutの表現では、「私は完全である」という機制と「あなたは完全であるが、しかし私はあなたの重要な部分である」（Kohut、1971: 25）という機制である。子どもの頃、自己対象（自分の一部であるように経験される対象で、通常、母親などの養育者）から「すごいね。えらいね。」という風に受けとめられ賞賛されることにより、誇大自己が満たされると、誇大性や顕示性が叙々に緩和されて、成熟した野心や自信としてパーソナリティに統合されるようになる。また、自己対象（通常、父親などの養育者）が理想的な像を示してくれたことにより、そのイメージは理想化された超自我として取り入れられ、生きる指針や自己規制を与えてくれる重要な心的構成要素になる。誇大自己が満たされなかった場合、自己顕示が異常に発達し、他者から飽くなき賞賛と注目を得ようとする。また、親への理想化に失敗すると、宗教の教祖やアイドルなどに心酔するなど、「強い他者」に傾倒、依存す

る傾向が見られる。以上のような形で、自己愛が発達、変形することがなく、子どものまま成熟が止まってしまった場合、自己愛人格障害になるというのがKohutの主張である。

また、Kohutは、自己愛人格障害の特徴の1つとして、「自己愛憤怒」を挙げた。これは、自分が期待したように相手が自分を賞賛してくれない、愛してくれないと、激しい怒りの感情や攻撃性を持つことを指すが、Kohutは、攻撃性は生得的なものではなく、自己対象から共感的な対応が得られなかったなど、発達早期の心理的外傷として二次的なものであると見ていた。

Kohutにとって、自己愛は、成熟した健康なものと未成熟な不健康なものの2種類存在するようである。親から適切な養育を受けることができれば、未成熟で誇大的な自己愛が生きるのに必要な成熟した自己愛に変形するが、「親から愛されない」あるいは適切な対応を受けられなかった場合には、成熟した自己愛を持つことができず、肥大化した自己愛・誇大自己に固着したままになってしまうという彼の説は、後述するAsperやMillerの説と似ているとも考えられる。

「共感と内省」を主軸とするKohutの理論は、理論の厳密さを欠き、内容が不明確でわかりにくい、臨床的な経験を重視しすぎるなどの批判があり、最近までふさわしい位置づけがされていなかったが、自己愛文化が蔓延し自己愛人間の時代ともいわれるようになった現代、人間理解の鍵となる理論として受け入れられつつある（佐方、1994）。

(4) Kernbergの研究

Freud同様、自己愛を否定的に論じているのがKernbergである。自己愛人格障害とは、正常な発達ラインのある段階に固着したものであるというKohutに対し、Kernbergは、正常な発達段階から逸脱して、病的な自己愛が肥大したものであると述べた。彼のいう誇大自己は「歪められた病的な自己表象（自己イメージ）」であり、この自己表象にリビドー備給し続けることが自己愛人格障害であるとしている。Kernbergの理論は、Mahlerの分離・個体化理論に基づいている。正常な発達の場合、分離・個体化の最終段階で、良い自己表象と悪い自己表象、良い対象表象と悪い対象表象が統合され、良い面も悪い面も備えた現実的な表象が確立する。それにより、子どもは「その人物に愛されることもあれば、憎まれることもあるという考え方を受け入れることができるようになる。また同時に、このアンビバレンスを受け入れ、それに耐えることができるようになる」（Kernberg、1982：293）。一方、「冷たくて拒絶的で、それにもかかわらず誉めそやするような親たち」に育てられた子どもは、極端に非現実的で理想化された自己概念を構成し、病的な誇大自己をつくりだす。そして、自己および他者に関する悪い側面は、自分自身から乖離され、抑圧されるか、他者に投影される。彼らの超自我は過酷で攻撃的なものになり、他者からの賞賛や承認だけが内的虚しさを産める糧となるのである。以上のように、Kernbergは、対象関係の能力を損なわない正常な自己愛と、正常な発達から逸脱した病的な自己愛とを区別した。

Kernbergの自己愛人格者像は、圧倒的な優越感を持っていると同時に、異常に他者からの賞賛に依存しており、他者からの賞賛が得られない場合には、虚脱状態に陥り劣等感に圧倒されてしまうというものであるが、これはKohutの自己愛人格者像と共通している。ただし、

Kernbergは「羨望」が彼らの顕著な特徴であるとしており、そこがKohutとの違いである。彼らは、羨望を取り除くために他者を過少評価し、過少評価することを通して、攻撃性を表現するパターンを作り出す。また、過少評価が、正常な自己評価を欠如させ、他人に対する共感性の能力を奪うとしている。また、Kohutが攻撃性（自己愛憤怒）は二次的なものであるとしたのに対し、Kernbergは、生得的、本能的なものであり、一次的なものであると主張している。

3. セルフ・ラブに関する研究

(1) セルフ・ラブという言葉について

現代の日本で、セルフ・ラブという言葉が使われることはほとんどない。self-loveという言葉を用いたのはFromm（1956）だが、和訳では「自己愛」となっている。先述したように、自己愛という日本語にはnarcissismの意味とself-loveの意味が混在しているが、どちらかといえば、「自己愛」は否定的なニュアンスで用いられることが多く、肯定的な意味で使われる場合は、「自己への信頼感」や「自信」という言葉が使われることが多いようである。

評論家の芹沢俊介は、「12歳の性と死－見えぬ『自己への信頼』」と題した記事の中で、長崎で幼児を誘拐し殺した12歳の少年の事件や、渋谷で声をかけられマンションに監禁されていた12歳の少女たちの事件をとりあげ、次のように述べている。

自分は自分であっていいという自己への信頼が培われるためには、〈いまここに・安心して安全に安定的に・自分が自分としてある〉ことをしっかりと保障された体験を不可欠とする。いうまでもなくそのような体験を保障するのが大人である。少女たちは、全的に自己をあずけうる、そのような信頼できる大人に出会ってきていないのではないか。（芹沢、2003；『朝日新聞』7月29日）

以上のように、最近の青少年には「自信」や「信頼感」が欠けているのではないかという記述は多い。上記の記事には、国際比較調査の結果、日本の子どもの自信力（自分の能力を信じ、今の自分を積極的に評価できる力）は極端に低いという報告も記載されている。また、その原因として、「見守っているよという安心感を与えていない」など大人の責任が大きいと指摘されている。ここでは、セルフ・ラブを、以上のような、最近、若者に欠けているとされている「信頼感」や「自信」とほぼ同様の意味と捉え、検討する。

(2) Frommの研究

「自己愛は「利己心」と同じであり、他者への愛にとって代わるものであるという教義は、神学、哲学、日常生活の型に広く浸みわたっている」（Fromm、1939：94）が、そのような傾向は心理学にも及んでおり、その適例がFreudのナルシシズム理論であると、Frommは指摘している。またFrommは、「他人に対する愛と自分に対する愛とはたがいに排他的であるという考えが論理的に間違っている」（1956：94）と、Freudの説を真っ向から否定し、その上で、「自分自身を愛することと他人を愛することは不可分の関係にあるのだ」（1956：94）、「自分自身に対す

る愛の態度は、他人を愛することのできる人すべてに見られる」(1956:95)と述べ、Freudのいうリビドー定量説とは全く異なる視点から愛について語り、自分を愛せない人は他人をも愛せないことを示唆した。また、Freudのいうナルシシズム傾向の強い利己的な人間は、他人を愛することもできないが、同時に、自分を愛することもできない、むしろ、自己嫌悪に陥っているのであると述べた。

また、Frommは、「にせものの愛」には2種類の形態があるとしている。1つは自己犠牲的、マゾヒズム的な愛であると述べ、一般的に美德とされている自己犠牲も、その背後にあるのは愛ではなく、利己主義や自己嫌悪などであると指摘している。「見かけの非利己主義のすぐ後ろには、かすかな、だが同じくらい強烈な自己中心主義が隠れている」(Fromm, 1956:99)、「そういう人は、愛する能力や何かを楽しむ能力が麻痺しており、人生に対する憎悪にみちている」(Fromm, 1956:99)と述べ、他人のためだけに生きているかのような自己犠牲的な人は、実は自分を愛することも他人を愛することもできない人であると分析している。

マゾヒズム的な愛の場合、一方が、自分より力があると感じられる相手の中に完全に埋没してしまうために、自分の自己、主導権、本来の姿を棄ててしまう。独り立ちできないという気持ちを起こさせる深い不安があるために、人は、自分自身の個としての自己から逃れ、別の人間の一部になり、そうすることによって安心を得、自分自身の中に見失った中心を見出したいと思う。こうした自分自身の自己の明け渡しは、「偉大な愛」の手本としてしばしばほめたたえられてきた。これは、実際には一種の偶像崇拜であり、自己疎外でもある。これが愛だと考えられてきたことによって、愛はいつそう誘惑的で危険なものになってしまった。(Fromm, 1939:106)

以上のようなマゾヒスティックな(自虐的)な愛の形は、Kohutのいう「理想化」が失敗した場合の自己愛障害の例と類似している。

一方、「互いに密接に結びついている愛の現象」のもうひとつを、Frommはサディズム的(他虐的)愛と呼び、「対象を呑み込んで、自分の意のままにできる意志のない道具にしてしまいたいという欲望から生まれる」(Fromm, 1939:106)と指摘している。これは不安と依存心から生じる衝動であるが、相手に対する支配権を確定することによって、強さと安心感が得られると述べている。

Frommにとっては、ナルシシズムとセルフ・ラブは全く別のものであり、自分を愛せない状態、つまり、セルフ・ラブが欠けているからこそ、ナルシシスティックな利己主義に陥るのであると説いた。また、他人に尽くす自己犠牲的な「愛情」が賞賛される傾向があるが、真の他者への愛情とは、自分自身を愛し自立できる人間が、他者に依存したり他者を支配することなく、自分をも他人をも大切にできる状態であるとしている。以上のように、Frommの説では、ナルシシズムとセルフ・ラブは全く相反するものであるとされている。

セルフ・ラブを獲得する条件としては、「子どもの時に他者から愛される経験をしたこと」と「慢性的憎しみの存続を支える全ての要因がないこと」(Fromm, 1939:109)を挙げており、

KohutやKernbergなどの説とはほぼ同様である。

(3) Eriksonの研究

上述したように、最近の若者は「居場所」がないと言う人が多く、「生きていてもいいんだ」「自分は自分であっていいんだ」という感覚を持てない人が増加しているという。このような「居場所感」や「安全基地（こころの安らぎの場）」（細井、1996）の感覚を、Eriksonは「「これでいいんだ」という感覚や、自分が自分自身であるという感覚、他の人々からなるだろうと信頼されているものに自分がなっていく感覚」（Erikson、1959：70）と称している。またEriksonは、このような感覚を「基本的信頼感」と呼び、乳児期の間に獲得しなければ「人生の危機」に陥ると指摘した。Eriksonは、「自己愛」や「セルフ・ラブ」という言葉は全く使っていない。だが、この基本的信頼感は、芹沢のいう「自己への信頼」とほぼ同義であると考えられ、自分を信頼することは自分を愛することと同じような感覚であるとすれば、セルフ・ラブの一種であると考えられる。またEriksonは、この基本的信頼感がアイデンティティの基礎になると述べている。小此木（1981）は、Eriksonの理論から、健康な自己愛とは以下のようなものであると整理している。

1. 母親（または他者）から愛されており、自分が愛することが母親からも喜ばれるという現実的な確信と、人間というものはそのような経験ができるものだという希望をもっていること。
2. Eriksonのいうアイデンティティの原型であり、源泉である。
3. 健康な自己愛を身につけた人間は、それ以後の人生で困難や不信を経験しても、人間と自分自身に対する信頼を抱き続けることができる。
4. 健康な自己愛は、母親から一方的に愛される経験から生まれるものではなく、自分の愛情表現が相手を喜ばせ相手の心をみたすという能動的な働きかけが相手から受け入れられるという自信を意味している。

小此木（1981）は、アイデンティティは健康な自己愛を源泉として確立し成熟していくものであるが、それが得られなかった場合、病的な自己愛が肥大した「自己愛人間」になってしまうと述べている。また、Erikson（1959）は青年期の危機として「アイデンティティの拡散」を挙げ、その根源は人生の初期の経験にあるとしている。アイデンティティが確立できず、自分が何者かわからなくなっている状態とは、病的な自己愛が肥大し、自己が疎外された状態なのではないだろうか。

(4) Millerの研究

Miller（1979）は、精神分析家としての臨床経験を通し、自己愛障害の特徴として、真の自己の喪失、あるいは「にせの自己」の創作とそれに伴う「誇大性あるいは誇大的空想」、また、その裏に隠されている抑うつを挙げている。それ以外には、不安定な自尊感情、完璧主義、愛情喪失への恐れとそれによる過度の同調傾向、激烈で中和されない強い攻撃性、過敏さ、恥や罪を感じやすい傾向、落ち着きのなさなどを特徴として記述している。具体的には、「賛嘆し

てもらうことを必要としており、それなしで生きることができない (Miller, 1994:60)」ため、実際に手がけることの全てを見事にやっけてのけるが、賞賛を得ることができなくなったときは、重篤な抑うつ状態に陥ってしまう。このような人は、他人からの賞賛や愛情を得るために、理想的、誇大的な自己像、つまり、「偽りの自己」を維持することにのみ専心しているのであると述べている。

偽りの自己にあまりにも夢中になっているために、そのような人は、他者への愛が不可能であるばかりでなく、信じられないような話ですが、たった一人、まったくへだてなく親しんでいるはずの人間－自己自身への愛もまた実現できなくなっているのです。(Miller, 1994: 111)

自分自身を愛せないがゆえに、誇大的な自己をアピールすることにより、他者からの愛情や賞賛を得ようとする自己愛人格障害者像は、Horneyの説と共通する部分が多く、またKohutやKernbergの自己愛人格者像とも重なる。ただ、Millerは、その背後には「自己喪失」があることを強調した。「自分の空腹感が本当の空腹から生じたのか、それともそんな「気がするだけ」なのか自分で全然わからない」(Miller, 1994: 69) ような状態、つまり、自分の感情や欲望が麻痺しているような状態を、Millerは「自己喪失」と呼んでいる。彼女は、このような症状の原因は、親が子どもを「自己対象」として自己愛的に取り扱ったこと、つまり、「ありのままの存在として尊重され、まともに向き合ってもらえ (Miller, 1994: 10)」なかったことや、感情や知覚表現が受け入れられなかったことにあるとしている。それにより、子どもは親が期待するような像に自分をあてはめることを最優先し、その結果、「真の自己」を自分でも見失ってしまうのであると述べている。また、このような態度をとる親は、親自身も子ども時代にそのような扱いを受けており、このような症状は世代間連鎖すると警告している。このような親子関係に関しては、Donald-Pressman & Pressman (1994) も、親が自分の要求を満たすことだけにまかけていると、子どもは、たとえそれが何であろうと、自分がすべきことは両親の要求に合わせることでと早期に学ぶので、自分自身の感情や判断への信頼を育てることができないと述べている。

(5) Asperの研究

Asper (1987) も、Miller同様、臨床活動を通し自己愛の障害を研究している。自己愛障害の特徴としては、見捨てられに対する不安、感情の欠如、誇大と抑うつ、性の障害、象徴理解の困難、不適切な認知、生い立ちを意識することの困難、過度の不安、不相応な憤怒、(人間関係における) 遠近感覚の欠如、集中力不足、過度の羞恥心、曖昧な要求を挙げているが、Millerの記述と共通する部分も多い。また、自尊心が不安定で、常に、誇大と抑うつという両極端の間を揺れ動いているという記述もMillerと共通するものである。

Asperは、従来注目されてきた誇大性に焦点を当てるのではなく、「見捨てられ」と「自己疎外」を中心に分析している。彼は、自己愛の障害、つまり、情緒的な見捨てられを経験すると、

周囲の人々の期待に応え他者からの賞賛を得ることで自分を救おうとし、同時に、相当堅い守り、つまり「ペルソナ」が前面に押し出されるようになると述べている。また、自分は疎外されており、自分自身のなかにも世界のなかにも居場所がないと、自身の存在の空虚感や無意味さを訴える患者が多いと記述している。

他者から愛情や賞賛を得るために、「見せかけの自己像（ペルソナ）」を立派にすることは十分に専念し、「ほんとうの自分」の感情や欲望がわからなくなってしまうという障害例は、Millerの臨床例とほぼ同一である。また、その原因は、幼児期の見捨てられ体験（親から自分の感情を共感的に認めてもらえなかった、わかってもらえなかった、など）にあるとしているのも、Millerと共通している。ただ、Millerの患者像は、一見、誇大的だが、その背後に抑うつが隠れているというものであったが、Asperの場合は、より「依存的」なタイプに焦点が当てられているようである。

自分自身を愛する能力が損なわれた人は、その苦しみを埋め合わせるために、強く賞賛できる、憧れの人を積極的に作り出そうとし、またこの理想化された人物のものであろうとして不断的な努力を重ねる。(Asper, 1987: 91)

Asperのナルシシスト像は、Kernbergが描いたような従来のナルシシストとは全く異なる。理想的な自己をアピールするという点では共通しているが、表面的には「誇大的」というよりも、「しがみつきの」や「依存」などが特徴となっているようである。

4. 臨床的側面から見た自己愛—自己愛人格障害

(1) アメリカ精神医学会の基準 (DSM-IV)²⁾

自己愛人格障害とは、その人格において自己愛的特徴が際立っており、その結果、長期にわたり、かつ、社会生活上の不適応や個人的なレベルでの苦悩といった広範囲な領域における障害をひき起こすような人格障害のことである (狩野, 1989)。アメリカ精神医学会が作成したDSM-IV (1994) の診断基準における特徴は、1) 自分を非常に優れている、理想的であるとする誇大性、2) 賞賛してほしい、愛してほしいという欲求が強いこと、3) 共感性の低さ、の3つに集約できる。1987年発行のDSM-IIIには記載されていた「他者評価への過敏性」と「批判に対して憤怒、羞恥、屈辱をもって反応する」という項目が、DSM-IVでは削除されているが、これらも重要な特徴であると考えられる (Jacoby, 1985)。

自己愛人格障害は、経済犯罪や知能犯、性犯罪の背景として多いものであるが、セクシャル・ハラスメントやDV、ストーカー行為との関連も指摘されている (町沢, 2005; 岡田, 2005)。有病率は、臨床症例の中では2～16%の間であり、一般的には人口の1%未満であると言われており、患者の50～75%が男性であると考えられている (町沢, 2005)。

(2) 自己愛人格障害の2つのタイプ～対人恐怖症との関連～

Kernbergは、慢性的で激しい嫉妬と、そうした嫉妬に対する防衛としての、他者の価値の切

り下げや万能的コントロールなど、一般の人々が「自己愛的人格」に対して抱いているような否定的、誇大的な面を強調した。それに対し、Kohutは、抑うつ的側面、自己価値観の欠如、絶望感など、より過敏な面を強調している（Gabbard, 1989, 1994；Jacoby, 1985；土地・宮下, 2001）。

また、Gabbard（1989, 1994）は、自己愛人格障害には「周囲を気にかけないoblivious自己愛者」と「過剰に気にかけるhypervigilant自己愛者」の2つのタイプがあるが、DSMの診断基準では「周囲を気にかけない」タイプしか示されていないと述べている。表1にその2つのタイプを記述する。

表1：自己愛人格障害の2つのタイプ

周囲を気にかけない自己愛的な人	過剰に気にかける自己愛的な人
1. 他の人びとの反応に気づくことがない。	1. 他の人びとの反応に敏感である。
2. 傲慢で攻撃的である。	2. 抑制的で、内気で、あるいは自己消去的でさえある。
3. 自己に夢中である。	3. 自己よりも他の人びとに注意を向ける。
4. 注目の中心にいる必要がある。	4. 注目の的になることを避ける。
5. 「送信者であるが、受信者ではない。」	5. 侮辱や批判の証拠が無いかどうか注意深く、他の人びとに耳を傾ける。
6. 明らかに、他の人びとによって傷つけられたと感じることに敏感である。	6. 容易に傷つけられたという感情をもつ。羞恥や屈辱を感じやすい。

(Gabbard, 1994：89)

どちらのタイプも、高い自己評価を維持しようと必死になっているが、その対処の仕方はかなり異なっている（Gabbard, 1989, 1994）。「周囲を気にかけない」タイプは、自分の業績を誇示することにより、また他の人々の反応を無視することにより、自己愛的傷つきから自分を守っている。一方、「過剰に気にかける」タイプは、傷つきやすい状況を回避することによって、また誇大的空想が受け入れられない場合はそれを他人のせいにすることによって、自己評価を維持しようとする。これら2つのタイプは全く異なる性質であるように見えるが、多くの患者はこの2つのタイプの混合という症状を示す（Gabbard, 1989）。このGabbardの説には、実証的な支持も得られている。たとえば、Wink（1991）は、350名を対象に質問紙調査を実施し、密かなcovert自己愛と顕かなovert自己愛の2つの形態があると結論づけた。この2つは、他者を軽視すること、うぬぼれ、放縦などの特性については共通しているが、前者は、内向的で過敏、防衛的で不安が強く、傷つきやすいという特徴があり、後者は、外向的で攻撃的、自信家で他者からの賞賛を必要としているという特徴があるという。

Masterson（1981, 1993）は、児童の精神分析治療などを通し、発達理論に基づく自己愛型障害の理論を構築した。主要な臨床特徴として、誇大性、過度な自己関与、他者からの賞賛や承認の追求、他者への関心、共感の欠如などを挙げている。また、DSMの診断基準に該当するような「自己顕示型exhibitionist」以外にも、表面的には、臆病ではにかみやで抑圧され無力で

あるように見えるが、治療を受ける中で、入念な幻想に彩られた誇大自己を表す「引き出し型ナルシストcloset narcissist」が存在することを指摘している。同様に、Broucek (1982) は「恥」について精神分析的な考察を行い、自己愛人格障害には「自己中心egotistical型」と「解離dissociative型」があると述べている。期待と現実が異なることを知ったときに「恥」を経験するが、その恥の経験を補償し、現実の自己を否定しようとして誇大的になる場合が「自己中心型」、潜在的には誇大自己を持っではいるが、通常の意識からは隔離している場合が「解離型」であると説明されている。この2つはGabbardのいう「周囲を気にかけないタイプ」と「過剰に気にかけるタイプ」に該当すると考えられる。

彼ら以外にも、ナルシズムの傾向と表面的な謙遜や引きこもりとの関連を指摘する研究者は多く（たとえば、Horney, 1939；町沢、2005）、しばしば対人恐怖症との関連が指摘されている。ただし、すべての対人恐怖が自己愛的であるとは限らず、自己顕示傾向は少ないがひたすら恥に敏感なタイプも存在すると、岡野（1998）は指摘している。対人恐怖症は、日本において特に多い神経症であることから、日本の文化特性が反映されたものであると考えられている（谷、1997）。また実際に、日本人の場合は、「過剰に気にかけるタイプ（過敏型）」の方が優勢で、表に出ているものの多くはこちらのタイプであり、「周囲を気にかけないタイプ（誇大型）」はより無意識になっていることが多いという指摘もある（老松、2001）。

近年、一般青年を対象に、過敏型自己愛傾向や対人恐怖症に関する研究が多く実施されている。過敏型自己愛傾向が強いほど不安やうつ傾向が強いこと（上地・宮下、2005）や自己愛的脆弱性が直接的・間接的に対人恐怖傾向を強めること（上地・宮下、2009）が示唆されるなど、自己愛傾向と対人恐怖性にはなんらかの関連があると考えられる。しかし、自己愛傾向と対人恐怖心性には有意な負の相関が見られた（清水・海塚、2002）という報告もあり、自己愛のどの側面を検討するかということが重要であると思われる。これまで欧米を中心に実施されてきた自己愛研究は「誇大型」に焦点が当てられてきた傾向が強く、日本でもナルシスト像は誇大的なイメージが強いが、今後は、「過敏型」に関する研究をより一層進めていく必要があると考えられる。

(3) 自己愛人格障害～自己愛同一視～

小此木（1981）は、日本的な自己愛は、アメリカ型の自己愛のような強い自己主張という表れ方ではなく、自分の自己愛の満足を犠牲にしてわが子の自己愛を満たすことで満足するというような、見かけの上では非常にマゾヒスティックな形をとることが多いと分析している。これは、自身では満たすことにできない自己愛を、相手の活躍や成功を通して実現させようという心理過程であると考えられるが、このような相手を自分と同じであると思うことで自らの自己愛を満たそうとする心理は「自己愛同一視」と呼ばれている（井上・松井、1998）。このようなタイプをKohut & Wolf（1978）は「理想化渴望パーソナリティ ideal-hungry personality」と呼び、地位、権力、美、知性、人格などが優れていると思われる他者を賞賛し、その他者を「自己対象」として自分の一部のように感じていられる間だけ、自分に価値があるように感じられるという特徴があると述べている。このようなタイプの人は構造的な欠陥を抱えているので、

「神」のような他者に失望しても、また新たな「自己対象」を求め続ける傾向があるという。「理想化渴望パーソナリティ」になる原因としては、「理想化された親イメージ」の発達が阻害されたため、自己愛に障害を抱えてしまったことが考えられる。「理想化渴望パーソナリティ」に関する実証研究としては、Robbins & Dupont (1992) の研究が挙げられる。彼らは、セラピーグループに参加している78人の患者を対象に調査を行い、その結果、強い誇大・自己顕示欲求を示した群は、自らを支配的ではあるが友好的であると認識していたのに対し、強い理想化欲求を示した群は、従順でありながらもいくぶん敵対的な対人態度をもっているという自己評価を示したことを報告し、「理想化渴望パーソナリティ」に該当するような症状を示す患者が実際に存在することを示唆した。また、「理想化」が未熟な場合の顕著な例として、アイドルに熱狂し失神する少女たちや、新興宗教に心酔し殉死した女性信徒などが挙げられている（中西、1987；中西・葛西、1992）。少女、女性信徒と記載されていることから、理想化欲求をもち対象を「自己愛同一視」するのは女性に多いことが推察される。

5. 自己愛人格傾向の性差、および、ジェンダーとの関連

ナルシシズムの性差について、Freud (1914) は、「完全な対象愛は、本来は男性に特有なものである」(254)、「女性では、性的な過大評価をとまなう本来の対象愛が形成されにくくなると考えられる」(255) とし、特に美女の場合には、発達にともなって自己満足が発生し、愛することではなく愛されることだけを求めるようになると述べている。このような言葉は、書かれてから100年後の現在では、非常に性差別的であるように思える（Donald-Pressman & Pressman, 1994）。Freud以降、自己愛とジェンダーの関連について明確に言及した理論は少ない（Haaken, 1983；Philipson, 1985）。

臨床研究においては、報告されている自己愛人格障害の患者の大半は男性であることが報告されている（Akhtar & Thomson, 1982；町沢、2005；Masterson, 1981）。その理由について、Akhtar & Thomson (1982) は、男児は特別に扱われる場合が女児より多いからなのか、あるいは、自己愛人格傾向は男性の心理的・性的な発達と絡み合っているからなのかと、問題提起している。それに対し、Philipson (1985) は、精神分析の文献にジェンダーの記載がないのは、発達理論が対象にしているのは男児だけであるという事実を隠しているのであり、男性の発達経験に基づき自己愛が定義されているので、自己愛人格傾向の基準にも男性の方がより該当しやすいと指摘している。また彼女は、自己愛とジェンダーの関連について、男性はアイデンティティ形成にあたり、女性以上に母親との明確な分離を経験しなくてはならないが、分離後も自我を維持していかななくてはならないために誇大自己的な傾向が見られる一方、女性は母親から同一視される傾向があり、その結果、女性の自立心は妨げられ依存的な自己愛が強まると述べている。つまり、低い自尊感情、心的構造の欠陥、愛情への無意識の強い渴望などは男女に共通する特徴であるが、女性は、尊敬し愛する他者と同一化し「溶解」してしまうような、曖昧な自我の境界しか持てない傾向があると考えられる。Haaken (1983) は、自己愛人格障害者の大半が男性なのは、女性患者が診断基準に当てはまらないからではないかと述べている。

臨床経験に基づく研究では、Reich (1953) の研究が挙げられる。Reichは、ある理想を求め

て偉大な人物との交際を求めてやまない一群の女性患者たちについて考察した結果、彼女らは見捨てられ去勢された感情を経験したことで、自己愛が欠乏し、性的理想の内在化・理想化の障害を抱えていると分析した。Reich (1960) はまた、身体全体をペニスのように感じるという男性患者の例などを取り上げ、彼らが非常に男性性にこだわり男性性で他者を圧倒したいと思っていることなどについて記述しており、男女で障害の表れ方が異なることを示した。

国内の研究では、細井 (1981) が、成人女性の自己愛傾向を調査した結果、妊娠によってナルシズム傾向が強まるが、出産以降は対象愛的傾向を示すことを明らかにした。この傾向を、細井は、「ナルシズムと対象愛が統合された“再生したナルシズム”」(42)と呼んだ。つまり、それは、子どもを自分の一部として考え子どもを同一視することにより、自分自身の自己愛を満たそうとすることであるとし、極端な例としては、子どもの意志に反し親の要求をおしつけることなどが考えられると警告している。母子関係について、Miller (1994) は次のように述べている。多くの社会では、少女たちは女であるがゆえに、男性よりひどい目にあっている。そして、母親になった少女たちは、自分を苦しめたのと同じ蔑みを、今度は自分の子どもに再移植する。そうされた男児たちが大人になると、母親にされたことを他の女たちに向かって復讐するようになる。このようにして「破壊性」は世代から世代へと「連鎖」していくのである。

実証研究においては、自己愛の男女差に関し、様々な議論がなされているが、男性の方がより強い自己愛を示すという報告が多い (Carroll, 1989; 角田, 1998; 川崎・小玉, 2007, 2010; 小西・山田・佐藤, 2008; 本嶋, 2006; 小塩, 1998; 清水・海塚, 2002; Watson, Taylor, & Morris, 1987)。一方、自己愛と性差には関連はなかったという報告も見られる (Raskin & Hall, 1981; 相良, 2006)。佐方 (1986) は、男子の方が概して強い自己愛を持ち、特に優越感やリーダーシップ、自己有能感を強く意識しているが、自己顕示・自己耽溺については性差が見られず、性差については疑問が残ると述べている。以上のように、男女どちらがより強い自己愛傾向を示すかについては結論は定まっていない。

自己愛の強さについての性差は明確ではないが、自己愛傾向は男女で異なった性質を示すことが考えられる。たとえば、男子については、年齢や学歴による自己愛の差異は見られなかったが、女子の場合は、大学生>短大生>専門学校生>看護学生という順に得点差が見られ、年齢というよりも学歴などのバックグラウンドが自己愛に関連していることが示唆された (佐方, 1986)。また中山 (2007) は、評価過敏性―誇大性自己愛尺度を用い、小学校6年生から大学生までを対象に調査を実施した結果、性別と自己愛の間に統計的に有意な因果関係は認められなかったが、誇大性得点についてはどの学年でも男子の方が高く、評価過敏性得点に関しては、中学2年生以外では女子の方が高いことが示されたことを報告しており、そのような差異の要因として、自己評価構造が男女で根本的に異なっていること、つまり、女性は親密性を重視する一方、男性は自律性や個人的達成を重視する傾向があることを挙げている。性差とKohut理論の関連については、松並 (2011) が、未熟な自己愛を測定する尺度の下位尺度のうち、「誇大化」得点は男性が有意に高く、「理想化」得点は女性が有意に高かったことを報告している。また、男性のナルシストには自己誇大傾向が明らかに見られたが、女性にはそのような傾向は見られなかったという調査結果も提出されており (Morf & Rhodewalt, 2001)、男性の自己愛

傾向は誇大性と関連しているが、女性の自己愛傾向は違ったものであると考えられる。

実際に見られる行動や症状についても、不適応的自己愛の行動面での表れ方が男女によって異なることが示唆されている (Tschanz, Morf, & Turner, 1998)。たとえば、女性の場合は、より依存的で執着的な対人行動に、男性は、搾取・利用や権力への執着、リーダーシップなどの行動に表れるとされており (Carroll, 1989)、極端な場合、男性は、他者からの賞賛や愛情を得るために、虚言を繰り返し誇大的な自己をアピールしたり暴力をふるったりする傾向があるとされている (松並, 2008)。このように自己愛の病理性が男女で異なるのは、女性のナルシシストはKohut理論における理想化の障害が原因であり、男性のナルシシストは鏡映の障害が原因であることが考えられる (Heiserman, & Cook, 1998)。

自己愛とジェンダーの関連では、自己愛と男性性との関連を報告した研究は多く (たとえば、Carroll, 1989; Watson, Taylor, & Morris, 1987; Watson, Biderman, & Sawrie, 1994)、小塩 (1998) は、自己愛傾向の特徴である「優越感・有能感」や「自己主張」が、男性にとって望ましいとされる「指導力のある」や「自己主張のできる」等の性質と類似していることが要因ではないかと考察している。一方、「社会的に望ましいとされている女性性」は自己主張性の発達の妨げになる (Sawrie, Watson & Biderman, 1991) と考えられており、女性性はNPIなどに表れる誇大的自己愛とは異質なものであると考えられる。日本での実証研究においても、自己愛と女性性との関連は総じて弱く、特に「自立・主張性」との関連が弱かった (松並・中村, 2000; 中村・松並, 2001)。また、女性のみを対象にした研究においても、誇大的な女性は強い男性性を持ち、依存的な女性は強い女性性をもつ傾向が示されている (Carroll, Corning, Morgan, & Stevens, 1991)。

以上のように、自己愛の表出がジェンダーと関連し男女によって異なるのは、社会で期待されている性役割行動や適応的な対人行動がジェンダーによって異なることが原因であると考えられる (Morf & Rhodewalt, 2001)。また、不適応的な自己愛は望ましい性役割を体得できないことに関連していることが報告されており (Watson, Biderman, & Boyd, 1989; Little, Watson, Biderman, & Ozbek, 1992)、ジェンダーや性役割は自己愛に少なからぬ影響を及ぼしていると思われる。しかし、自己愛には男女それぞれの異なる基盤があることを示唆した文献は多いにもかかわらず、実証研究においては結論は出ておらず (Heiserman, & Cook, 1998)、特に国内においては、自己愛とジェンダーに関する研究は少ない。

6. 自己愛に関する理論のまとめと問題点

Freudは、ナルシシズムとはリビドーが自己に向かっている状態であり、対象愛とは正反対のものであると定義した。それに対し、Horneyは、ナルシシズムは「自己膨張」と考えるべきで、「真の自尊心」とは質が異なるものであると主張した。Horneyは、自己に関心が向かっている状態を、「自己膨張」と「真の自尊心」の2種類あると考えていたようである。Kohutは「未熟な自己愛」は「成熟した自己愛」へと発達するので、健康な大人は対象愛と自己愛を併せ持つものであると考えた。また、「不健康な自己愛」とは、適切な養育を受けられなかったために、未熟な状態に固着してしまったものであるとした。Kernbergは、病的な自己愛を正常な発達か

ら逸脱したものであるとしており、つまり、正常な自己愛と病的な自己愛の2種類があると考えていたようである。

Frommは自己愛をセルフ・ラブと呼び、セルフ・ラブを持たない人は他者愛も持てないと主張した。また、セルフ・ラブが欠如した人の「にせものの愛」は、マゾヒズム的、サディズム的であると述べている。Frommはナルシシズムについて特に言及していないが、Frommがいうマゾヒズム的・サディズム的愛情は、いわゆる「不健康的な自己愛」や「自己膨張」の状態に当たると考えられる。Eriksonは「基本的信頼感」という言葉を用い、自分を愛することや自分を信頼することの重要性を説いた。Millerにとって、自己愛の障害とは、「自己喪失」し「にせの自己」に夢中になっている状態を指す。また、セルフ・ラブという言葉は使っていないが、自己愛障害者は「自分を愛せなくなっている」状態であると述べている。Asperは「見捨てられ」と「自己疎外」に苦しむ自己愛障害者を詳細に記述したが、やはり、「自分自身を愛する能力が損なわれている」状態であると述べている。自己愛については、上記の理論以外にも多くの説がある。たとえば、Stolorow（1975）は、これまでのFreudやKohutの論とは異なり、自己愛を「自己表象の構造を維持する機能」と定義した。自己表象が統合され安定性を保ち、肯定的な感情に包まれているような状態に維持することに成功している場合には、ナルシシズムは健康であるが、それが失敗した場合は不健康になるという。

ナルシシズムとセルフ・ラブ、どちらの言葉も自己愛という日本語に訳されていることが混乱を招いているが、ナルシシズムという言葉自体にも、セルフ・ラブのような健康的な意味にも、病的な意味にも使われているという概念的混乱が見られる。このような混乱を避けるためには、ナルシシズムという言葉は病的な意味でのみ使用することにした方がよいのではないか（Goren, 1995）。本研究においては、不健康・不適応的な自己愛をナルシシズム、健康的・適応的な自己愛をセルフ・ラブと定義する。2つの言葉の概念を整理すると表2のようになる。

表2：「ナルシシズム」と「セルフ・ラブ」の概念整理

	「ナルシシズム」	「セルフ・ラブ」
Freud	リビドーの自己への備給	
Horney	自己膨張・他者依存	自尊心
Kohut	未熟な自己愛	成熟した自己愛
Kernberg	病的な自己表象	正常な自己愛
Fromm	マゾヒズム的・サディズム的愛情	セルフ・ラブ
Erikson	アイデンティティの拡散	基本的信頼感
Miller	自己喪失	真の自己の表出・自分を愛する
Asper	見捨てられ・自己疎外・ペルソナ	「ほんとうの自分」・自分を愛する

Gabbardは、自己愛人格障害には「周囲を気につけない自己愛者」（誇大型）と「過剰に気にかける自己愛者」（過敏型）の2つのタイプがあると主張している。自己愛人格障害や自己愛人格傾向には多くの分類があるが、このGabbardの2つのカテゴリーにはほぼ該当すると思われる分類は多い。たとえば、Kernbergの障害例はより「誇大型」であり、Kohutの提示した患者

例は「過敏型」に近いとされている（表3）。

表3：自己愛人格障害の分類（1）

Gabbard	「周囲を気にかけない自己愛者」	「過剰に気にかける自己愛者」
	Kernberg の例	Kohut の例
Wink	顕かな自己愛	密かな自己愛
Masterson	自己顕示型	引き出し型
Broucek	自己中心型	解離型

以上のような、自己顕示的で無神経タイプと対人恐怖症的で過敏タイプの分類ではおさまりきれないタイプも見られる。Kohutは「誇大自己」と「理想化された親イメージ」の2つの自己愛構造体を提示し、「誇大自己」の発達が阻害された場合には「誇大的なタイプ」、「理想化」の発達が阻害された場合には「依存的なタイプ」に陥ると述べている。この場合の「誇大的なタイプ」はGabbardのいう「周囲を気にかけない自己愛者（誇大型）」に類似しているが、「依存的なタイプ」と「過剰に気にかける自己愛者（過敏型）」が同類であるとはいえない。「過敏型」の特徴は、他者からの評価にこだわるあまり他者との接触を避け、自己愛の傷つきを極力避けようというものであるが、「依存的なタイプ」の特徴は、「すばらしい他者」を自己の一部であると感じることにより、自己愛を満たそうとするとともに、他者との接触を避けるような対人恐怖症的な行動は見られないからである。「誇大的なタイプ」と「依存的なタイプ」の分類は表4のように整理できると考えられる。

表4：自己愛人格障害の分類（2）

	誇大的なタイプ	依存的なタイプ
Kohut	誇大性渴望型	理想化渴望型
Horney	自己膨張型	マゾヒズム型（他者依存型）
Fromm	サディズム的（他虐的）	マゾヒズム的（自虐的）
小此木	西洋型	日本型
Robbins& Dupont	誇大・自己顕示欲求型	理想化欲求型
Philipson	男性	女性
Reich	男性	女性

上記の分類にも見られるように、PhilipsonやReich、中西らなどは、男性が「誇大的なタイプ」、女性が「依存的なタイプ」に該当する場合が多いとしている。つまり、これらの分類に関しては、性差やジェンダーとの関連が考えられる。Gabbardの分類にある「過敏型」は、対人恐怖症や引きこもりなどの症状を示す人に男性が多いということからも、主に男性を対象に作られたものといえるのではないだろうか。男性のナルシシストは「誇大型」か「過敏型」に分類されるといえるが、女性のナルシシストは主に「依存的なタイプ」に、あるいは、「誇大的なタイプ」か「依存的なタイプ」に該当するのではないだろうか。自己愛人格障害の患者の大半が男性なのは、「依存的なタイプ」の存在が見落とされていることが原因ではないかとも考え

られる。発達理論が対象にしているのは男児だけである（Philipson, 1985）という説もあるが、「依存的なタイプ」は女性に多いため今まで注目されてこなかったのではないかと考えられる。

依存性と自己愛の関連について、長沼・落合・落合（2000）は、不適応的な自己愛が、相手を束縛し相手の中に自分の存在を絶えず確認しようとする「しがみつき」と関連していることを報告している。松並・中村（2003）もまた、不適応的な自己愛が高い人は男女ともに依存する傾向が強いことを、特に女性は男性以上に、周囲の影響を受けやすく他者に依存しやすい傾向が見られることを示唆している。さらに、上地（2011）は、臨床的観点からみると、依存性と自己愛の関連の検討は有意義な研究テーマであろうと述べており、依存的な自己愛について、特に性差に焦点を当てて検討することが重要であると考えられる。

自己愛の問題は、主に臨床場面において顕在化することが多いが、実証研究において検証することが難しい。また、どのような側面に焦点を当てるかで結論も異なってくると考えられる。本来、「自分を愛する」ことは自然で健康的なことであることを認識すると同時に、自己愛の病理性は何かということに焦点を当て、自己愛の問題を研究していく必要がある。また、自己愛の問題に限らず、ジェンダーとの関連を常に視野に入れて研究していくことも重要であると考ええる。

注

- 1）本論文は松並知子（2006）.「現代社会における自己愛とジェンダー～テキスト分析と実証研究の統合の試み」大阪大学言語文化研究科博士学位論文（未公開）の一部を加筆修正したものである。
- 2）2013年5月に発行予定のDSM-Vの草稿には、自己愛人格障害は含まれていない。

引用文献

- Akhtar, S. & Thomson, J.A. (1982). Overview: Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, 139, 12-20.
- American Psychiatric Association. (1994). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders four edition (DSM-IV)*. Washington, DC.
- （高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳（1996）.『DSM-IV精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院）
- Asper, K. (1987). *Verlassenheit und selbstentfremdung*. Olten, Walter Verlag.
- （老松克博訳（2001）.『自己愛障害の臨床』創元社）
- Broucek, F. (1982). Shame and its relationship to early narcissistic developments. *International Journal of Psychoanalysis*, 63, 369-378.
- Carroll, L. (1989). A comparative study of narcissism, gender, and sex-role orientation among bodybuilders, athletes, and psychology students. *Psychological Reports*, 64, 999-1006.
- Carroll, L., Corning, A.F., Morgan, R.R. & Stevens, D.M. (1991). Perceived acceptance, psychological functioning, and sex role orientation of narcissistic persons. *Journal of Social Behavior and Personality*, 6 (4), 943-954.
- Donald-Pressman, S. & Pressman, R.M. (1994). *The narcissistic family*. Lexington Books.
- （竹前ルリ・山口恵美子・真板彰子訳（1997）.『自己愛家族』金剛出版）
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press.
- （小此木啓吾訳（1973）.『自我同一性』誠信書房）

- Freud, S. (1914). Zur Einführung des Narzißmus, *Jahrbuch der Psychoanalyse*, 6, 1-24.
 (中山元編訳 (1997). 「ナルシズム入門」『エロス論集』ちくま学芸文庫 231-273.)
- Fromm, E. (1939). Selfishness and self-love In 1994. *Love, sexuality and matriarchy*. Rainer Funk via Liepman AG.
 (滝沢海南子・渡辺憲正訳 (1997). 「利己心と自己愛」『愛と性と母権制』新評論 84-120.)
- Fromm, E. (1956). *The Art of Loving*. Harper&Brothers.
 (鈴木晶訳 (1991). 『愛するということ』紀伊国屋書店)
- 福島章 (1992). 『青年期の心』講談社.
- Gabbard, G.O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- Gabbard, G.O. (1994). Psychodynamic psychiatry in clinical practice. *The DSM-IV edition*. American Psychiatric Press, New York.
 (舘哲朗監訳 (1997). 『精神力動的精神医学Ⅲ』岩崎学術出版社)
- Goren, E.R. (1995). Review essay: Narcissism and the interpersonal self. *Psychoanalytic Psychology*, 12, 329-342.
- Haaken, J. (1983). Sex differences and narcissistic disorders. *American Journal of Psychoanalysis*, 43, 315-324.
- Heiserman, A., & Cook, H. (1998). Narcissism, affect, and gender An empirical examination of Kernberg's and Kohut's theories of narcissism. *Psychoanalytic Psychology*, 15(1), 74-92.
- Horney, K. (1939). *New Ways in Psychoanalysis*. Charles E. Tuttle Company.
 (安田一郎訳 (1972). 『精神分析の新しい道』ホーナイ全集 3 誠信書房)
- 細井啓子 (1981). 「ナルシズム的傾向に関する発達の研究 (1)」『心理学研究』52 (1), 38-44.
- 細井啓子 (1996). 『おとなの目を気にする子どもたち』ブレーン出版.
- 生地新 (2000). 「現代の大学生における自己愛の病理 (大学生のメンタルヘルスと心身症)」『心身医学』40, 191-197.
- 井上果子・松井豊 (1998). 『境界例と自己愛の障害』サイエンス社.
- 伊藤洸 (1982). 「ナルシズム研究 (その1)」『精神分析研究』26 (2), 47-71.
- Jacoby, M. (1985). *Individuation und Narzißmus*. Verlag J. Pfeiffer GmbH.
 (山中康裕監修・高石浩一訳 (1997). 『個性化とナルシズム』創元社)
- 角田豊 (1998). 「共感性と自己愛傾向の関連」『心理臨床研究』16 (2), 129-137.
- 上地雄一郎 (2004). 「自己愛の概念と定義」上地雄一郎・宮下一博編著『もろい青少年の心—自己愛の障害—発達臨床心理学的考察』北大路書房 2-8.
- 上地雄一郎 (2011). 「自己愛の臨床と実証研究の間」小塩真司・川崎直樹 (編) 『自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係』37-51.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2001). 「コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成の試み」『甲子園大学研究紀要 人間科学編』38, 1-10.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). 「コフートの自己心理学に基づく自己愛脆弱性尺度の作成」『パーソナリティ研究』14, 80-91.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 「対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性、自己不一致、自尊感情の関連性」『パーソナリティ研究』17, 280-291.
- 狩野力八郎 (1989). 「自己愛パーソナリティ障害」『こころの科学』28, 35-39.
- 川崎直樹・小玉正博 (2007). 「親和動機のある方から見た自己愛傾向と対人恐怖傾向」『パーソナリティ研究』15, 301-302.
- 川崎直樹・小玉正博 (2010). 「自己に対する受容的認知のあり方から見た自己愛と自尊心の相違性」『心理学研究』80 (6), 527-532.
- Kernberg, O.F. (1982). Narcissism. In Gilman, S.L. (ed) *Introducing psychoanalytic theory*. Brunner/ Mazel.

- (小此木啓吾訳 (1984).「自己愛」『岩波講座精神の科学別巻』岩波書店 279-315.)
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York, International Universities Press.
- (水野・笠原監訳 (1994).『自己の分析』みすず書房)
- Kohut, H. & Wolf, E.S. (1978). The disorders of the self and their treatment: An outline. *International Journal of Psychoanalysis*, 59, 413-425.
- 小西瑞穂・山田尚登・佐藤豪 (2008).「自己愛人格傾向についての素因」『パーソナリティ研究』17, 29-38.
- Lasch, C. (1979). *The culture of narcissism*. New York : Norton.
- Little, T., Watson, P.J., Biderman M.D. & Ozbek, I.N. (1992). Narcissism and object relations. *Psychological Reports*, 71, 799-808.
- 町沢静夫 (2005).『自己愛性人格障害』駿河台出版社.
- Masterson, J.F. (1981). *The narcissistic and borderline disorders*. Brunner/Mazel.
- (富山幸佑・尾崎新訳 (1990).『自己愛と境界例』星和書店)
- Masterson, J.F. (1993). *The emerging self : A developmental, self, and object relations approach to the treatment of the closet narcissistic disorder of the self*. Brunner/Mazel.
- 松並知子 (2008).「メンタルヘルスとジェンダー」青野篤子・赤澤淳子・松並知子 (編)『ジェンダーの心理学ハンドブック』ナカニシヤ出版 189-208.
- 松並知子 (2011).「自己愛の表れ方の性差—理想化と誇大感」『日本心理学会第75回大会論文集』1288.
- 松並知子・中村晃 (2000).「自己愛の適応・不適応の側面の検討 (2) —性差との関連」『日本心理学会第64回大会発表論文集』44.
- 松並知子・中村晃 (2003).「自己愛と共感性・依存性—性差との関連」『日本心理学会第67回大会発表論文集』1325.
- 三船直子 (2010).『自己愛スペクトル理論・実証・心理臨床実践』大阪公立大学共同出版会.
- Miller, A. (1979). Depression and grandiosity as related forms of narcissistic disturbances. *International Journal of Psychoanalysis*, 6, 61-76.
- Miller, A. (1994). *Das Drama des begabten Kindes*. Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main.
- (山下公子訳 (1996).『才能ある子のドラマ』新曜社)
- 本嶋可奈子 (2006).「青年期における対人的葛藤のあり方と自己愛傾向との関連」『九州大学心理学研究』7, 125-137.
- Morf, C.C. & Rhodewalt, F. (2001). Unraveling the paradoxes of narcissism: A dynamic self-regulatory processing model. *Psychological Inquiry*, 12 (4), 177-196.
- 長沼恭子・落合幸子・落合良行 (2000).「自己愛傾向からみた友人関係における“山アラシ・ジレンマ”への「心理的対処反応」の特徴」『筑波大学心理学研究』22, 183-190.
- 中村晃 (2004).「健全な自己愛と不健全な自己愛」『千葉商科大学紀要』42 (1), 1-20.
- 中村晃・松並知子 (2001).「自己愛の適応・不適応と性役割の検討」『大阪大学教育学年報』6, 255-266.
- 中西信男 (1987).『ナルシズム—天才と狂気の心理学』講談社.
- 中西信男・葛西真紀子 (1992).「現代青年の対人関係にみるナルシズム」『青少年問題研究』41, 1-18.
- 中山留美子 (2007).「児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程—自己愛における評価過敏性、誇大性の関連の変化から」『パーソナリティ研究』15, 195-204.
- 大淵憲一 (2003).『満たされない自己愛—現代人の心理と対人葛藤』ちくま新書.
- 老松克博 (2001).「日本人と自己愛の問題」Asper, K. (1987). 老松訳『自己愛障害の臨床』創元社 327-340.
- 岡田尊司 (2005).『誇大自己症候群』ちくま新書.

- 岡野憲一郎 (1998). 『恥と自己愛の精神分析』 岩崎学術出版社.
- 小此木啓吾 (1981). 『自己愛人間』 朝日出版社.
- 小塩真司 (1998). 「自己愛傾向に関する研究—性役割との関連」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』 45, 45-53.
- 小塩真司 (2010). 「膨れ上がった自己—自己愛的パーソナリティ」『心理学ワールド』 50, 9-12.
- Philipson, I. (1985). Gender and narcissism. *Psychology of Women Quarterly*, 9, 213-228.
- Pulver, S. (1970). Narcissism: the term and the concept. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 18, 319-341.
- Raskin, R. & Hall, C.S. (1981). The narcissistic personality inventory: alternate for reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, 45, 159-162.
- Reich, A. (1953). Narcissistic object choice in women. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 22-44.
- Reich, A. (1960). Pathological forms of self-esteem regulation. *Psychoanalytic Study of the Child*, 15, 205-232.
- Robbins, S.B. & Dupont, P. (1992). Narcissistic needs of the self and perceptions of interpersonal behavior. *Journal of Counseling Psychology*, 39 (4), 462-467.
- 相良麻里 (2006). 「青年期における自己愛傾向の年齢差」『パーソナリティ研究』 15, 61-63.
- 佐方哲彦 (1986). 「自己愛人格の心理測定—自己愛人格目録 (NPI) の開発」『和歌山県立医科大学進学課程紀要』 16, 63-76.
- 佐方哲彦 (1994). 「自己と自己愛はどう発達するか—コフートの自己心理学」梶田叡一編著『自己意識心理学への招待』 有斐閣 67-77.
- Sawrie, S.M., Watson, P.J. & Biderman, M.D. (1991). Aggression, sex role measures, and Kohut's psychology of the self. *Sex Roles*, 25 (314), 141-161.
- 芹沢俊介 (2003). 「12歳の性と死—見えぬ『自己への信頼』」『朝日新聞』 7月29日夕刊
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 「青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連」『教育心理学研究』 50, 54-64.
- Stolorow, R.D. (1975). Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psychoanalysis*, 56, 179-185.
- 忠井俊明 (2005). 『逃亡者たち—脱現実と自己愛の病理』 ミネルヴァ書房.
- 谷冬彦 (1997). 「青年期における自我同一性と対人恐怖的心性」『教育心理学研究』 45 (3), 254-262.
- Tschanz, B.T., Morf, G.C. & Turner, C.W. (1998). Gender differences in the structure of narcissism: A multi-sample analysis of the narcissistic personality inventory. *Sex Roles*, 38 (9/10), 863-870.
- 牛島定信 (1995). 「現代社会と自己愛型人格障害」『精神科治療学』 11月号 星和書店.
- Watson, P.J., Biderman, M.D. & Boyd, C. (1989). Androgyny as synthetic narcissism: sex role measures and Kohut's psychology of the self. *Sex Roles*, 21 (3/4), 175-207.
- Watson, P.J., Biderman, M.D. & Sawrie, S.M. (1994). Empathy, sex roles orientation and narcissism. *Sex Roles*, 30 (9/10), 701-722.
- Watson, P.J., Taylor, D. & Morris, R.J. (1987). Narcissism, sex roles, and self-functioning. *Sex Roles*, 16 (7/8), 335-350.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597.
- 矢幡洋 (2005). 『働くことしない人たち—拒絶性と自己愛性』 中公新書ラクレ.
- 山崎久美子・妙木浩之 (2011). 『自己愛の時代—現代社会の病理の解明に向けて』 現代のエスプリ 522.
- 山本昌輝 (1997). 「クライン派におけるナルシシズム研究の展開」『哲学論集 (大谷大学哲学会)』 44, 1-14.

